

医療の伝え方、普及啓発のあり方、伝えてみよう

阿真 京子 氏

一般社団法人知ろう小児医療守ろう子ども達の会 代表



要旨

小さな子ども達を育てる保護者を中心に活動する当会では、過去11年に140回を超える小児医療の講座を開催してきた。親が小児科医から子どもの病気や医療について学ぶことで、医療現場を圧迫し、子ども自身にも負担となるような不要な受診を減らすこと、医療者と親とのコミュニケーションにおけるすれ違いを防ぐこと、子育てに対する不安を軽減するためにも、親が医療についての知識を身につけることが大切だと考え、活動を継続している。しかし、親になった人が全国どこでも小児医療について知る機会を持てることを目標としているものの、伝える人材が不足している現状がある。そのため多忙な医師だけに頼らず、子どもを取り巻く環境にいる看護師や保健師、保育士、子育て支援施設職員などが、その伝え方を身につけ、講座に限らず、日常の中で積極的に親が知識を得る機会を作ることが大切であると考え、そこで本事業では親子の日常に寄り添って支援する立場の方を対象に、様々な場面において小児医療を伝えられるようになるために必要な知識を学ぶ「小児医療基礎講座」を企画、実施した。12名の講師による全3日間にわたる講座では、子どもの病気、事故、薬、予防接種、こころ、医療の現状などについて学び、最終日には、参加者自身で「医療の伝え方、普及啓発のあり方」について伝える方法を考え発表する機会を設け、参加者同士の交流や各自の現場での展開を促すきっかけ作りを行った。

1.はじめに

当会は、小さな子ども達を育てる保護者を中心に活動をする団体である。講師に小児科医を迎え、保護者へ子どもの医療を伝える講座を開催してきた。過去11年間で140回以上にわたり実施した講座は、小児科医からの一方通行の情報ではなく、親の疑問やニーズを取り入れ、不安に寄り添う小児医療の情報となるよう努めてきた。

しかし、全国的に医療について親へ伝えていくためには、小児科医のみならず、子どもを取り巻く環境にいる看護師や保健師、保育士、子育て支援施設職員などがその伝え方を身につけ、講座に限らず、日常の中で、積極的に親が知識を得る機会をつくることが大切であると考え、本事業を計画した。

2.目的

親を取り巻く支援者が正しい医療についての知識を

身につけることで、親子が医療を理解するようになり、そしてこの親世代が高齢化した時には、正しく医療を理解し適切な医療とのかかわりを持てるようになることを期待する。

3.事業内容

『小児医療基礎講座』

(1) 日程

2017年9月23日(土)、10月8日(土)、10月28日(土)

午前の部、午後の部

(2) 会場

株式会社富士通総研様セミナールーム

(3) プログラム詳細

第1日目 午前の部

① 子どもの病気

・「小児の救急とホームケア・小児科の現状」

朝霞台中央総合病院(現TMGあさか医療セン

ター)小児科部長 小林真澄先生

- ・「見落としてはいけない病気・支援者がおさえておきたい病気」

聖徳大学児童学部児童学科 原田正平先生(小児科医)

第1日目 午後の部

②子どもの事故

- ・「防げるものを防ごう！子どもの事故と対策」
子供の安全研究所 所長 鈴木徹郎先生(小児科医)
- ・「子どもの年齢別の事故発生の現状と障害予防の取り組み」

東京大学大学院医学系研究科 地域看護学教室
博士課程 本田千可子先生(保健師)

③子どもと薬

- ・「小児の薬の基礎知識」
国立国際医療研究センター病院 AMR臨床リファレンスセンター 松永展明先生
- ・「小児の感染症」
国立国際医療研究センター病院 AMR臨床リファレンスセンター 具芳明先生
- ・「抗菌薬について知ってほしいこと」
国立国際医療研究センター病院 AMR臨床リファレンスセンター 藤友結実子先生

第2日目 午前の部

①予防接種

- ・「細胞と免疫」
慶應大学大学院医学部医学研究科(国立研究開発法人 国立成育医療研究センター)古市宗弘先生
- ・「予防できる病気について、効果と副反応」
国立研究開発法人 国立成育医療研究センター 生体防御系内科部 感染症科 医長 宮入烈先生

第2日目 午後の部

②日本の医療の現状

- ・「日本の医療 各地域の医療の現状」
群馬大学医学部附属病院 集中治療部(小児科) 助教(病院) 中林洋介先生(元厚生労働省 小児・周産期専門官)
- ・「小児の医療費、難病等小児医療政策」
厚生労働省 健康局がん疾病対策課長 佐々木昌弘氏(元同省 医師確保等地域医療推進室長)

第3日目 午前の部

①子どものころ

- ・「乳幼児期に求められる子どものこころの基礎理解、学童期・発達に応じて必要な基礎知識」

国立研究開発法人 国立成育医療研究センター
こころの診療部 児童・思春期リエゾン診療科 田中恭子先生

第3日目 午後の部

②ワークショップ

- ・「医療の伝え方、普及啓発のあり方、伝えてみよう」
一般社団法人知ろう小児医療守ろう子ども達
の会 代表 阿真京子

(4)参加者

保健師、看護師、医師、保育士、理学療法士、臨床検査技師、子育て支援職、医療事務職、医師など、のべ約30名

4.感想と効果

小児医療をテーマに多岐にわたる講座を開催することができた。多様な角度からの内容、様々な立場の参加者の交流、情報交換により、今後各自の現場で役立てたいという意欲的な感想をいただいた。(感想の一部を抜粋)

- ・どの講座も自身の支援のプラスになる知識や技術になるため実りある時間でした。
- ・臨床医だけではなく、行政に関わっている方のお話も聞くことができ、大変勉強になりました。
- ・もう一度、自分で考えて復習し、職場に持ち帰り、全体で考え、話し合う場を作ろうと思います。

5.活動の展開と課題

今後も定期的に、このようなプログラムが実施され、全国の保健師・看護師・保育士・子育て支援者等に受講してもらうことで、各地で子どもの医療に関する講座が展開され、また小児医療に関する相談に応じられるようになることを期待する。他職種の連携と情報共有により、地域包括ケアの小児版が築かれ、支えあえる地域が育っていくことを目指したい。今回の助成をいただかなければ、これだけの講師陣による質の高い連続講座は実現し得なかった。ただし当会のような1団体が今後単独で運営を担うには、マンパワー、費用共に大きすぎる事業であるということも痛感した。継続のためには、各専門職の業団体等との連携が課題となる。貴重な挑戦の機会を提供いただき、手応えと課題、目標を見出せたことに感謝の念を持ちつつ、今後の活動の糧としたい。